

令和 2 年 9 月 14 日現在

機関番号：35413

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13081

研究課題名（和文）絵本の読み聞かせにみる父親の育児参加の意識と実際

研究課題名（英文）Fathers participation in child-rearing through book reading activities with their children

研究代表者

鈴木 佳奈（SUZUKI, Kana）

広島国際大学・心理学部・准教授

研究者番号：20443252

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、家庭での子どもと父親・母親のかかわり方について調査することである。質問紙による意識調査に加えて、未就学児を持つ21組の家族の協力を得て、父親から子どもに絵本の読み聞かせをする様子をビデオに記録した。父親のうちおよそ3割は普段子どもに読み聞かせをすることがなく、読み聞かせたとしても、淡々と文章を読み進めるだけの父親もいる。さらに、夫婦へのインタビューから、日常の家事育児の総量のうち、夫が担っているのはだいたい2割くらいの分量であること、そしてそのような状況に対して夫も妻も葛藤を抱えているが、相手に遠慮してなかなか言い出せないでいることも明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

男性が家事育児に参加することへの社会的ニーズが近年ますます高まっている。コロナ禍によるステイホームも、男性が仕事と家庭とのバランスの取り方を見直すきっかけになっている。その一方で、男性の家事育児参加にかんするこれまでの研究は、質問紙による意識調査が主流で、男性が今、家庭でどのように妻や子どもとかわっていて、どのような困難さや葛藤を抱えているのか、どのような喜びを見出しているのか、をリアルに示すデータは得られていなかった。本研究は、読み聞かせのビデオデータ、アンケート回答、そして夫婦へのインタビューから、「父親の実情」を多面的に掘り起こすものである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the research is to investigate how fathers get along with their children at home. In addition to questionnaire, we video-recorded scenes in which 21 fathers read picture books aloud to their children. About 30% of the fathers do not regularly engage in such activities, and some of them are awkward readers. The interview with fathers and mothers also reveals that fathers take responsibilities only for one-fifth of the chores the family has to do on a daily basis. Neither fathers or mothers are satisfied with the situation, but they feel reluctant to ask for more from their partner.

研究分野：社会言語学、会話分析

キーワード：絵本の読み聞かせ 父親の育児参加 父親・母親・子どもの協働

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「育メン」という言葉に代表される、父親の育児参加に対する社会的ニーズや期待の高まりを受け、家族心理学などの分野で、父親の家事・育児参加についての調査は数多く行われている。しかしほとんどは質問紙による意識調査であり、観察法による実態調査は少ない。

発達心理学、教育学、保育学などにおける絵本の読み聞かせについての研究は、読み聞かせ自体の教育効果を測るもの、保育士などによる読み聞かせの研究、地域の読み聞かせボランティアの研究が中心となっている。家庭での読み聞かせについては、母親が調査対象のものがほとんどで、父親の読み聞かせの実態調査を主たる目的とした学術的研究は調べた限りではない。

子どもが参加する相互行為場面を観察・分析し、子どもの相互行為能力や相互行為参加のあり方、社会性の習得、「子ども」「大人」「親」「家族」といったカテゴリーの実践等を解明する研究が、社会言語学や会話分析の分野で蓄積されてきている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、父親による絵本の読み聞かせ活動をてがかりに、父親の育児参加の意識と実態を多角的に調査することである。具体的には、

- (1) 未就学児に対して父親が絵本を読み聞かせる場面をビデオ撮影し、会話分析の手法で、父親・子ども間の相互関与および母親の介入の実態を探る。
- (2) 父親と母親に対してアンケートを行い、育児参加に対する父親の当事者意識と、妻からの評価を抽出して比較する。
- (3) 父親と母親にペアインタビューを行い、家事・育児に関する協力体制の実際や葛藤、双方の育児家事分担満足度を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究の3つの目的に対応して、性質の異なる3種類のデータを得た。主なデータ提供者は、未就学児を持つ、広島県在住の家族21組である。

(1) 父親による絵本の読み聞かせ活動ビデオデータ

広島国際大学の行動観察室にて、実験的観察法により、父親から未就学児への絵本の読み聞かせ活動をビデオ撮影した。読み聞かせ用の絵本は、ストーリー性の高いもの、なぞなぞもの、図鑑や地図など様々なタイプを取り混ぜて40冊ほど準備し、最初の1冊を除いて自由に選んでもらうようにした。読み聞かせの時間は1組あたり最短22分14秒、最長40分12秒で、収録したビデオの総時間数は10時間57分39秒であった。

(2) 父親・母親を対象とした、家事・育児分担等についてのアンケートデータ

石井クンツほか(2011)、Work-Fam(2013)を参考に、以下の項目を盛り込んだ調査票を作成し、21組の父親と母親それぞれに回答を求めた。

- ・個人の基本属性(年齢、最終学歴、職業、平均勤務時間・残業時間)
- ・家族の基本属性(子どもの数・年齢・性別、同居者、利用する支援サービス、世帯年収についての主観的社会経済的地位)(父親のみ回答)
- ・家事育児の分担等に関する質問(家事育児の分担割合、家事育児を行う頻度、読み聞かせ時間、家庭生活や子どもについての信念、仕事と生活のバランス)
- ・夫婦のかかわりに関する質問(配偶者との会話時間、会話内容、夫婦ペアレンティング調整尺度(加藤ほか、2014))

アンケート調査については、さらに郵送法により、広島県在住で未就学児を持つ69組の夫婦の回答を得て、データの拡充を図った(調査対象100組、有効回答数69%)。

(3) 父親・母親へのペアインタビューデータ

21組の夫婦に対し、アンケートへの回答および読み聞かせ活動終了後に、ペアインタビューを行った。インタビューは半構造化で、次のような項目を尋ねた。

- ・当日の読み聞かせ活動の感想
- ・現在の家事育児分担割合とその満足度、過去からの変化
- ・子どもが生まれる前の父親観や家族観と、その変化
- ・子どもの育てやすさ、子どもから見た父親・母親の姿

21組のうち19組に対しては同じ研究者がインタビュアーとなり、うち17組にはSkype経由でインタビューを実施した。インタビュー時間は、1組あたり最短32分42秒、最長56分30秒で、収録したビデオの総時間数は15時間21分17秒分であった。

4. 研究成果

(1) 対象者の基本属性

主対象である21組の基本属性は、夫が30代15名(71.4%)、40代6名(28.6%)、妻が30代17名(81.0%)、40代4名(19.0%)であった。子どもの人数は1人が4組(19.0%)、2人が14組(66.7%)、3人が3組(14.3%)であった。夫は21名全員が就業者であったのに対し、妻のうち13名(61.9%)が就業者、8名(38.1%)が就業していなかった。夫の回答による世

帯平均年収の主観的社会経済的地位は「平均的」が17名(81.4%)、「平均よりもある程度高い」が4名(19.0%)だった。

一方、アンケートのみの回答を得た69組については、夫が20代6名(8.7%)、30代42名(60.9%)、40代20名(29.0%)、50代1名(1.4%)、妻が20代6名(8.7%)、30代49名(71.0%)、40代14名(20.3%)であった。子どもの人数は1人が31組(44.9%)、2人が37組(53.6%)、3人が1組(1.4%)であった。夫は69名全員が就業中であったのに対し、妻のうち37名(53.6%)は就業中、32名(46.4%)は就業していなかった。夫の回答による世帯平均年収の主観的社会経済的地位は「平均よりかなり低い」が4名(5.8%)、「平均よりある程度低い」が14名(20.3%)、「平均的」が32名(46.4%)、「平均よりもある程度高い」が19名(27.5%)だった。

表1：平日と休日の読み聞かせ時間

(2) 父親による絵本読み聞かせの実際と母親の介入

父親の読み聞かせの実情

平日と休日の絵本の読み聞かせ時間に対する父親90名の回答からは、平日は約半数の父親は読み聞かせをしておらず、その分週末に読み聞かせの時間を取ろうとしている様子がうかがえる。また、約3割の父親は、平日も休日も、ほとんど読み聞かせをしていない実態も示された(表1)。

読み聞かせ時間(平日)		読み聞かせ時間(休日)					Total
		ほとんどしていない	10分未満	30分未満	1時間未満	1時間以上	
ほとんどしていない	Count	30	11	6	1	0	48
	% within row	62.5%	22.9%	12.5%	2.1%	0.0%	
10分未満	Count	0	14	11	0	0	25
	% within row	0.0%	56.0%	44.0%	0.0%	0.0%	
30分未満	Count	0	0	8	7	1	16
	% within row	0.0%	0.0%	50.0%	43.8%	6.3%	
1時間未満	Count	0	0	0	1	0	1
	% within row	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	
Total	Count	30	25	25	9	1	90
	% within row	33.3%	27.8%	27.8%	10.0%	1.1%	

読み聞かせ活動のビデオデータからも、齋藤(2015)の言う「言語的はたらきかけ」や「情緒的はたらきかけ」を行いながら読み聞かせる父親と、文章を淡々と読み上げていく父親がいることが見出されている。そのような読み聞かせのスタイルの違いが、普段の読み聞かせ経験の有無と関連するのかは今後の検討課題である。

父子の相互行為と母親の介入

実験室で読み聞かせの収録をしている間、母親は同席はするものの、特にやることを実験者から指示されたりはしていなかった。鈴木(2018)は、そのような状況下で母親が自発的に取った4つのコミュニケーション行動を取り上げ、それが父子の相互行為にどのような帰結をもたらしているのかを示した。きょうだいのうち一人が父親に読み聞かせをしてもらっている時、別の子が割って入ろうとしているのを「°°順番順番°°」となだめたある母親の行動は、父娘の相互行為に直接介入はしていないが、間接的に父娘の読み聞かせ活動の継続をサポートしている。逆に、別の母親が、読み聞かせが一区切りついた時点で、父親に先がけて「じゃあ絵本をかたづけましょう。よーい、スタート((手を叩く))」と子どもに声をかけた行動は、結果的に父親の関与を封じることになっている。その一方で、すべての行動は文脈依存적であり、またその状況で何らかの目的を遂行するためのものでもあるため、例えばSchoppe-Sullivanら(2008)が行なったような、行動観察をして、母親の行動を“maternal gatekeeping”や「母親としての能力」「子育てへの関与」等の面からコーディングする、という単純化には慎重になるべきであることも併せて論じた。

(3) 家事育児参加に対する父親の当事者意識と妻からの評価

本報告では、夫の家事育児分担割合に対する夫自身の意識と妻からの評価、「夫婦ペアレンティング調整尺度」(加藤ほか、2014)における夫と妻の回答の一致度、の2つのみを紹介する。データは欠損値を含むものを除いた86組分とする。

夫の家事育児分担割合に対する夫自身の意識と妻からの評価

日常に行う家事育児の総量を10とした時、自分とパートナーがそれぞれ何割分担しているかを、夫と妻双方に回答してもらった。夫の回答はM=2.14, SD=1.11, 妻の回答はM=2.33, SD=1.32で、双方とも夫の分担割合をかなり低く認識している(夫の分担割合を「7割」と答えていた妻が1名だけいたが、残りはすべて「5割」以下だった)。夫と妻の回答の相関は $r=0.606$, $p<.001$ で、 t 検定の結果からも、「夫群母集団と妻群母集団の回答の平均値が等しい」とする帰無仮説は棄却されなかった($t=-1.62$, $df=85$, $p=0.108$)。すなわち、夫の家事育児貢献度について、夫本人も妻も、ともにかなりシビアな評価を下していると言える。

「夫婦ペアレンティング調整尺度」(加藤ほか、2014)における夫と妻の回答の一致の有無

「夫婦ペアレンティング調整尺度」は、妻が夫の家事育児参加を促すような「促進行動」と、逆に参加を妨げるような「批判行動」をどれくらいの頻度でやっているかを測定する尺度である。まず、夫の回答と妻の回答との類似性を確認するために、尺度の構成項目それぞれで級内相関係数(ICC)を算出した(表2)。ICCが5%水準で有意でない項目は「(母親が父親に)子どもとの時間を与える」の1項目のみであった。また、ICCの値自体もいずれも0.1を超えており、かつ信頼性係数も最大で.709、最小でも.248であったことから、夫と妻の回答をペアデータとして、マルチレベル分析(清水、2014)を行うのが妥当であると確認された。

表 2 : 夫婦ペアレンティング調整尺度_級内相関係数

変数名	有効N	②		③		④		①		
		級内相関	95%下限	95%上限	DE	信頼性	dI1	dI2	F値	p値
夫分担	166	.550	.380	.683	1.550	.709	82	83	3.440	.000
コペア:考えを尋ねる	166	.465	.279	.635	1.465	.635	82	83	2.740	.000
コペア:手を貸すよう頼む	166	.379	.180	.549	1.379	.550	82	83	2.221	.000
コペア:ほめる	166	.442	.252	.600	1.442	.613	82	83	2.586	.000
コペア:手配や準備	166	.299	.091	.483	1.299	.461	82	83	1.855	.003
コペア:よいお父さん	166	.549	.380	.683	1.549	.709	82	83	3.437	.000
コペア:ありがとう	166	.491	.309	.638	1.491	.658	82	83	2.927	.000
コペア:子どもが喜ぶ	166	.426	.233	.587	1.426	.597	82	83	2.484	.000
コペア:他人に伝える	166	.455	.267	.610	1.455	.625	82	83	2.670	.000
コペア:子どもの時間を与える	166	.142	-.074	.345	1.142	.248	82	83	1.330	.099
コペア:非難	166	.402	.206	.567	1.402	.574	82	83	2.345	.000
コペア:いらいらを表す	166	.317	.111	.497	1.317	.481	82	83	1.928	.002
コペア:自分のやり方	166	.365	.164	.537	1.365	.535	82	83	2.148	.000
コペア:ムッとしてあきれた顔	166	.268	.058	.456	1.268	.423	82	83	1.732	.007
コペア:間違っている	166	.419	.226	.581	1.419	.591	82	83	2.445	.000
コペア:夫の批判を子どもに言う	166	.274	.064	.461	1.274	.430	82	83	1.756	.006
コペア:夫の批判を他人に言う	166	.187	-.028	.385	1.187	.315	82	83	1.460	.044

次に、各項目への夫と妻の回答に対してマルチレベル相関分析を行った(表3)。これは夫と妻の回答における、個人レベルと二者関係レベルの相関係数を推定する方法である。対角行列(太字)は級内相関を、上三角が個人レベルの効果、下三角が二者関係レベルの効果の推定値が示されている。

表 3 : 夫婦ペアレンティング調整尺度_マルチレベル相関分析

夫分担	コペア:考えを尋ねる	コペア:手を貸すよう頼む	コペア:ほめる	コペア:手配や準備	コペア:よいお父さん	コペア:ありがとう	コペア:子どもが喜ぶ	コペア:他人に伝える	コペア:子どもの時間を与える	コペア:非難	コペア:いらいらを表す	コペア:自分のやり方	コペア:ムッとしてあきれた顔	コペア:間違っている	コペア:夫の批判を子どもに言う	コペア:夫の批判を他人に言う	
夫分担	.550**	.087	.344**	.078	.035	-.032	-.072	-.076	-.014	.118	.274*	-.046	.113	.124	.231*	.039	.182
コペア:考えを尋ねる	.425*	.465**	.483**	.310**	.236*	.293*	.258*	.214*	.235*	-.137	.091	-.117	-.027	.039	.028	-.125	.015
コペア:手を貸すよう頼む	.406*	.652**	.379**	.307**	.152	.100	.065	.145	.041	-.021	.071	.083	.079	-.061	.017	-.024	.034
コペア:ほめる	.257	.489*	.643**	.442**	.130	.388**	.280*	.301**	.244*	-.072	.171	.035	.103	.055	-.025	-.048	.014
コペア:手配や準備	-.020	.558*	.628*	.748**	.299**	.260*	.191*	.276*	.138	.355**	-.069	.000	-.008	.066	-.041	-.069	-.020
促進 コペア:よいお父さん	.318*	.727**	.713**	.915**	.894**	.549**	.579**	.457**	.523**	.232*	.162	.028	.056	-.028	-.026	-.048	-.041
コペア:ありがとう	.407*	.683**	.513*	.822**	.846**	.908**	.491**	.489**	.346**	.241*	.053	.116	.023	-.061	.008	.000	.053
コペア:子どもが喜ぶ	.204	.728**	.620**	.845**	.732**	.777**	.850**	.426**	.404**	.208*	-.047	.055	.090	-.006	.067	.146	-.149
コペア:他人に伝える	.292*	.521**	.440*	.802**	.735**	.753**	.760**	.579**	.455**	.210*	.144	-.161	.040	-.041	.042	.032	-.170
コペア:子どもの時間を与える	-.279	1.024**	.794*	1.121**	1.173**	.819**	.695*	.655*	.697*	.142	-.039	-.096	.062	.089	-.044	.021	-.070
コペア:非難	-.176	.106	.394*	-.485**	.354	-.206	-.273	-.203	-.300	.256	.402**	.381**	.357**	.302**	.390**	-.204*	.270*
コペア:いらいらを表す	.036	-.196	.092	-.431*	-.312	-.462*	-.617**	-.420*	-.654**	.220	.628*	.317**	.588**	.619**	.423**	.430**	.431**
コペア:自分のやり方	-.277	-.423*	-.098	-.542*	-.087	-.443*	-.673**	-.601**	-.546*	-.134	.647**	.566*	.365**	.691**	.385**	.519**	.412**
批判 コペア:ムッとしてあきれた顔	-.220	-.392*	-.016	-.692**	-.623**	-.582*	-.672**	-.526*	-.867**	-.399	.673*	.993**	.614*	.268*	.445**	.534**	.441**
コペア:間違っている	-.149	.016	.480*	-.414*	.106	-.277	-.551**	-.372*	-.514*	.288	.980**	.800**	.859**	.884**	.419**	.433**	.302**
コペア:夫の批判を子どもに言う	-.227	-.370	.288	-.434*	-.492*	-.552*	-.639**	-.511*	-.591*	-.320	.621*	.398	.555*	.599*	.586*	.274*	.264*
コペア:夫の批判を他人に言う	-.506*	-.765**	-.243	-.654*	-.464	-.792**	-.1051**	-.322	-.472	-.035	.678*	.556	.781*	.742*	.895**	1.041**	.187*

二者関係レベルに限定すると、夫の家事育児分担割合と「夫婦ペアレンティング調整尺度」各項目との関連(黄色箇所)については、夫の家事育児分担を高く評価したペアは、妻が夫に「考えを尋ねる」、「手を貸すよう頼む」、「ありがとうと言う」頻度も高いと評価している。項目ごとの関連では、促進行動同士(うすみどり)、批判行動同士(うすオレンジ)で相関が有意な項目が多いことが示されている。促進行動と批判行動間(赤)でも、妻が夫に「手を貸すよう頼む」と「『あなたは間違っている』と言う」の相関以外はすべて有意な負の相関になっている。ここから、妻による促進行動の頻度が高いと評価している夫婦は、逆に妻の批判行動頻度を低く評価する傾向があることが読み取れる。促進行動と批判行動間で唯一有意な正の相関が確認されている「手を貸すよう頼む」と「『あなたは間違っている』と言う」($r=.480, p<.05$)は、手を貸すように頼みがちな妻は夫に「間違っている」と言う頻度も高い、と解釈できる。

さらに、このような「夫婦ペアレンティング調整尺度」に対して、探索的に因子分析を行った。夫婦の回答を一緒にして分析してみると(最尤法、プロマックス回転)、先行研究と同じ2因子構造で収束した(因子間相関は-0.281、係数は「促進行動」が.873、「批判行動」が.880であった)。一方、夫と妻の回答を別々に分析したところ(最尤法、プロマックス回転)、こちらでも先行研究と同じ2因子構造が得られた(夫データでの因子間相関は-0.262、係数は「促進行動」が.906、「批判行動」が.893、妻データでの因子間相関は-0.210、係数は「促進行動」が.861、「批判行動」が.867であった)。

夫と妻のデータを比較することで、夫が妻から家事育児参加を促されていると感じているのか、またそれが妻の認識と一致しているかがわかる。「促進」に対する夫の回答は $M=2.95, SD=0.081$ 、妻の回答は $M=2.95, SD=0.800$ 、一方「批判」に対する夫の回答は $M=2.12, SD=0.848$ 、妻の回答は $M=2.34, SD=0.849$ であった。表4が示す通り、父親と母親の回答には中程度の相関が見られる。

さらに t 検定で、両群の母集団の平均値は等しいかを検定したところ、「促進」においては有意な差は見られなかったが ($t=-0.0857$, $df=85$, $p=.932$)、「批判」においては 5%水準で妻群のほうが平均値が有意に低いことが示された ($t=-2.12$, $df=84$, $p=.037$, $p<.05$)。

表 4: 「促進行動」「批判行動」回答相関

		促進 (夫回答)	促進 (妻回答)	批判 (夫回答)	批判 (妻回答)
促進 (夫回答)	Pearson's r	—			
	p-value				
促進 (妻回答)	Pearson's r	0.658***	—		
	p-value	<.001			
批判 (夫回答)	Pearson's r	-0.262*	-0.193	—	
	p-value	0.015	0.074		
批判 (妻回答)	Pearson's r	-0.270*	-0.181	0.420***	—
	p-value	0.013	0.097	<.001	

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

(4) 家事育児に関する父親・母親間の協力体制と葛藤

(3)の①節で述べたように、父親の家事育児への関与はまだ限られたものであり、またそのことに父親も母親も自覚的である。実際に、夫婦へのペアインタビューの中でも、そのような状況に対する葛藤が語られている。大島ほか(2020)では、6組の夫婦へのインタビューデータを修正版グランデッド・セオリー・アプローチの手法で分析した。夫婦の間で比較的安定した関係性が形成される「夫婦間ホメオスタシス」がある一方で、夫婦ともに、仕事による制約や育児の想像以上の大変さから、「協力したいができないという葛藤」「協力してほしいが任せていいのかという葛藤」が生まれ、しかもそのことを相手に遠慮して言い出せない、というさらなる葛藤の悪循環に陥る、といったプロセスが見出された(図1)。そのような悪循環からどうすれば抜け出し、均衡の取れた「夫婦間ホメオスタシス」に戻れるのか、あるいは葛藤を経験したことで、夫婦関係の新たなステージに向かうのか、といったことも視野に入れて、今後さらにプロセスモデルを精緻化していく。

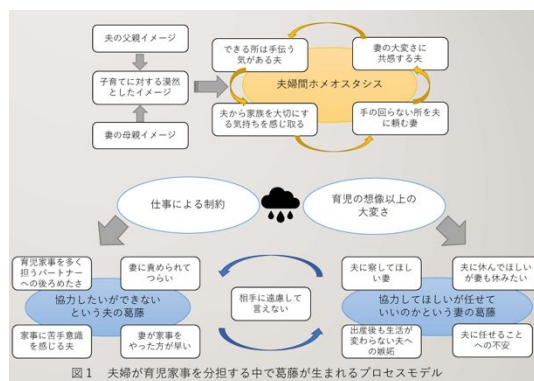


図1 夫婦が育児家事を分担する中で葛藤が生まれるプロセスモデル

(5) 今後の展望

「3. 研究の方法」で示したように、本プロジェクトで採取したデータは多岐にわたっており、まだまだ多角的に分析することが可能である。アンケート回答から得られた量的情報を、質的データを分析する足がかりにしたり、逆にビデオデータやインタビューデータから抽出した質的情報をアンケート結果の解釈・考察に利用したりするなど、データの多様性を活かした分析方法の模索も含めて、引き続きデータの分析を進めたい。

< 引用文献 >

石井クンツ昌子ほか、「仕事と生活に関する男性全国調査」家族班報告書資料、2011、
<http://www.dc.ocha.ac.jp/gender/workfam/event/workfam2011%20enquete2.pdf>
 Work-Fam、ジェンダー・格差センシティブなワーク・ライフ・バランスを目指して 最終報告書、2013、
http://www.dc.ocha.ac.jp/gender/workfam/report/_SWF_Window.html?pagecode=1
 加藤道代、黒澤泰、神谷哲司、夫婦ペアレンティング調整尺度作成と子育て時期による変化の横断的検討、心理学研究、84(6)、2014、566-575
 齋藤有、幼児期の絵本の読み聞かせ場面における大人の関わりに関する研究 - 幼児の自発的な学びを促す側面への着目 -、風間書房、2015
 鈴木佳奈、行動観察から見る夫婦の「コペアレンティング」(ラウンドテーブル「夫婦のコペアレンティングを考える」話題提供) 日本発達心理学会第29回大会、2018
 Schoppe-Sullivan, S. J., Brown, G. L., Cannon, E. A., and Mangelsdorf, S. C., Maternal gatekeeping, coparenting quality, and fathering behavior in families with infants. *Journal of Family Psychology*, 22(3), 2008, 389-398.
 清水裕士、個人と集団のマルチレベル分析、ナカニシヤ出版、2014
 大島聖美、鈴木佳奈、西村太志、夫婦が家事育児分担の葛藤に向き合う過程、日本発達心理学会第31回大会、2020

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 大島聖美	4. 巻 Vol.67
2. 論文標題 青年が不満に感じた親の養育態度	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 茨城大学教育学部紀要. 人文・社会科学・芸術	6. 最初と最後の頁 89-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西村太志・古谷嘉一郎・長沼貴美	4. 巻 43(3)
2. 論文標題 居住地の社会増減率と親との居住距離が子育てに関する評価に及ぼす影響	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 応用心理学研究	6. 最初と最後の頁 277-278
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木佳奈・久次弘子・甲田純生	4. 巻 第5巻
2. 論文標題 大学生と中高校生との連携ディベート授業の実践と課題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 広島国際大学心理学部紀要	6. 最初と最後の頁 35-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西村太志・中川千晴・松村綾乃・村上招子	4. 巻 第4巻
2. 論文標題 熟達者による絵本読み聞かせ体験中の大学生の反応と感情状態，子育て意識の関連性	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 広島国際大学心理学部紀要	6. 最初と最後の頁 63-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大島聖美	4. 巻 第4巻
2. 論文標題 青年から見た父親及び母親の好ましい姿 - KJ法による構造化を通して -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 広島国際大学心理学部紀要	6. 最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 大島聖美, 鈴木佳奈, 西村太志
2. 発表標題 夫婦が家事育児分担の葛藤に向き合う過程
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大島聖美, 鈴木佳奈, 西村太志
2. 発表標題 夫婦はどのように育児・家事分担を行うのか?
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木佳奈
2. 発表標題 質的研究手法としての会話分析
3. 学会等名 第83回 言語・音声理解と対話処理研究会パネルセッション「言語・音声・対話研究における量的手法と質的手法の対話」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Suzuki Kana ,Oshima Kiyomi, Nishimura Takashi , and Tano Shinji
2. 発表標題 Does a mother “cut in” on father-child interaction?
3. 学会等名 The 15th International Pragmatics Conference. Belfast, Northern Ireland, United Kingdom (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Nishimura Takashi ., Furutani Kaichiro., Soma Toshihiko., & Naganuma Takami
2. 発表標題 What factors affect the use of one’s spouse as a “social surrogate” before and during pregnancy?
3. 学会等名 12th biennial conference of the Asian Association of Social Psychology (AASP 2017) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木佳奈
2. 発表標題 分析ツールとしての「成員カテゴリー化装置 (MCD)」を再検討する
3. 学会等名 エスノメソドロジー・会話分析研究会2017年秋の研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木佳奈
2. 発表標題 行動観察から見る夫婦の「コペアレンティング」(ラウンドテーブル「夫婦のコペアレンティングを考える」話題提供)
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大島聖美
2. 発表標題 大学生向け夫婦コミュニケーションプログラムの作成：長期的な効果の検討
3. 学会等名 日本家族心理学会第34回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大島聖美
2. 発表標題 青年向け親共感促進プログラムの長期的効果の検討
3. 学会等名 日本心理臨床学会第36大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大島聖美
2. 発表標題 夫婦はどのように育児・家事分担を行うのか？（ラウンドテーブル「夫婦のコペアレンティングを考える」話題提供）
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西村太志
2. 発表標題 ペアレンティング調整は、夫と妻の適応や子育て観にどのような影響を及ぼすのか？（ラウンドテーブル「夫婦のコペアレンティングを考える」話題提供）
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nishimura Takashi ., Katagiri Sakie., Watanabe, Aki., Furutani Kaichiro., Soma Toshihiko., & Naganuma Takami
2. 発表標題 Who uses their spouse as a "social surrogate"? A study of the social surrogate hypothesis regards social network expansion among mothers with preschool-aged children.
3. 学会等名 31st International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Nishimura, Takashi., Furutani Kaichiro., Soma Toshihiko., & Naganuma Takami
2. 発表標題 Child-rearing and social networks in Japan: From a viewpoint of the homogeneity and the heterogeneity of parental social networks
3. 学会等名 The 23rd International Association for Cross-Cultural Psychology (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 西村太志, 古谷嘉一郎
2. 発表標題 子育てにおける「社会的代理人」選択に関する検討(1) -対象別の選択理由の特徴-
3. 学会等名 日本応用心理学会第83回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 大島聖美
2. 発表標題 大学生用コペアレンティング・プログラム作成の試み
3. 学会等名 第26回家族社会学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 西村太志, 片桐咲恵, 古谷嘉一郎, 相馬敏彦, 長沼貴美
2. 発表標題 子育てにおける「社会的代理人」選択に関する規定要因の検討(1)-関係流動性とシャイネスの交互作用に着目して-
3. 学会等名 日本社会心理学会第57回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 西村太志, 大本裕香, 戸田清香
2. 発表標題 省エネ行動トランプを用いたジグソー法が環境配慮意識に与える影響 当事者性の違いに着目した検討
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミクス学会第63回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 鈴木佳奈, 久次弘子, 甲田純生
2. 発表標題 大学生と中学生 / 高校生との連携ディベート授業の実践と課題
3. 学会等名 社会言語科学会第39回研究大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

鈴木 佳奈、TSSテレビ新広島 わんぱく大作戦webページに子育てアドバイスコラム連載（2020年1月「子育て中の夫婦の会話、どうしてる？」、2019年10月「『プログラミング教育』って何？」、2019年7月「うちの子、本を読んでくれませんか...」、2019年4月「うちの子、嘘をつくことがあって...」）、
<https://www.tss-tv.co.jp/wanpaku/kosodate/backnumber.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大島 聖美 (OSHIMA Kiyomi) (00710089)	茨城大学・教育学研究科・講師 (12101)	
研究分担者	西村 太志 (NISHIMURA Takashi) (30368823)	広島国際大学・健康科学部・准教授 (35413)	